

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



Yuki Ikeda

1987年埼玉県生まれ。高校卒業後に訓練校で表具づくりを学んだ後、1652年から続く老舗の十五代目・石井三太夫氏に師事。以来、都内の工房で腕を磨いている。



江戸表具(えどひょうぐ)

表具とは絵や書を保存鑑賞するため、布や紙を貼って裏打ちすることをいう。中国で生まれ、日本には仏教とともに伝来したとされている。雅を表す京都表具に対し、江戸表具は佻び寂びを表現するのが特徴。

江戸表具師

池田 優生 氏

文化財修復を夢見て、掛軸づくりを究める。

床の間を飾る掛軸、日本家屋に欠かせない襖や屏風、障子などを表具という。表具は仏教と深い関わりを持つ。写した経を巻物に仕立てる技術が、後に掛軸づくりや襖の張り替えなどに生かされたからだ。

東京・東上野。昔の風情を残すこの町で、池田優生さんは表具の伝統を継承すべく、日々汗を流す。表具屋の長男として生まれたが、高校卒業目前までこの仕事に関心が無かったという。

きっかけは？

池田「一時はプロを目指してサッカーに明け暮れていました。しかしある日、表具に没頭する父の姿が目に入り、手を動かすものづくりに魅力を感じるようになりました」

表具師の道に進むことを決意した池田さんは、あえて外での修業を志し、

創業360年を超える老舗の門を叩いた。現在、仏壇用の小さな掛軸づくりに励むが、今回初めて床の間の掛軸に挑むこととなった。

まずは絵や書が描かれた本紙を飾る「裂地」との取り合わせ。「本紙が人なら裂地は着物」、水仙が描かれた本紙を映えさせる色柄を、数百ものの中から見極める。

つぎに裏打ち。これは裏に和紙を貼ることで、本紙の皺を取ると同時に保存性を高めるための工程。破かないよう、弛ませないよう、薄い和紙を貼り合わせるの難しい。普段とは和紙の大きさも違うため緊張の連続だった。

そして、最初に選んだ裂地を断ち、本紙の上下と左右につなぐ。4つの角全ての柄を合わせるため針で目印を打つが、本紙に傷を付けることは決して許されない。それはこの世に一枚しか存在せず、後の世代に再び掛軸に仕立てられる物だからだ。

最後まで気を緩めることなく、自分の持てる全てを注ぐことで、水仙が引き立つ一幅の掛軸を完成させた。

将来の夢は？

池田「師匠は文化財修復の権威でもあり、自分もその仕事をしてみたい。絵の具が剥がれ、紙が破れた掛軸を直し未来に引き継ぐ。いつかそんな表具師になりたいですね」

表具師の大先輩である父に、「今は自分がすべきことを突き詰めろ」と背中を押してもらいながら、一つ一つの仕事に全力を尽くす。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2012年4月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MORE!!
まだ遠い夢を目指し、日々努力する姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE
WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版
パソコンやタブレットでご覧になれます。

アットホーム明日への扉

検索



TV番組
ディスカバリーチャンネル(CS) 冠番組
「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00



ビジョン
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!
最新号のご案内 好評公開中

No.054/製硯師(せいけんし) 青柳 貴史 氏